

Title	小泉先生と理論経済学
Sub Title	Dr. Koizumi as a theoretica l economist
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.11 (1966. 11) ,p.1218(48)- 1239(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19661101-0048
Abstract	
Notes	小泉信三博士追悼特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661101-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小泉先生と理論経済学

寺尾 琢 磨

- 一、大正初期のわが国の経済学
- 二、華々しいデビュー
- 三、ジェヴォンズと福田徳三博士
- 四、先生のジェヴォンズ評価
- 五、先生と古典学派

一、大正初期のわが国の経済学

小泉先生の社会的活動はこれを大きく三つの時期に分けることができよう。第一は大学卒業(一九一〇)から塾長就任(一九三三)までの教授時代、第二は塾長退任(一九四七)までの塾長時代、そして第三はそれ以後の東宮御教育常時参与時代である。先生の活潑な頭脳活動はこの三つの時代を通じて終始かわることはなかったが、しかし主たる関心の対象がそれぞれの時代によって変わったのは当然である。もちろん先生が最後まで経済学に関心を持ちつづけたことは事実だが、それが最も

純粹な形をとったのは、言うまでもなく第一の時代、すなわち教授時代の二十余年である。先生の経済学上の業績は殆どすべてこの間になされたと言つて差支えないのである。

しかしこの時期の先生の対象も、理論経済学から次第に社会思想、とくにマルクス学説に移行し、理論経済学者としての活動はむしろ初期に限定された感がある。もとより先生の著名なマルクス批判も、武器はこの初期に鍛えられた理論に外ならないから、理論経済学者としての先生に時期的一線を画すことは不可能だが、後期の活動についてはそれぞれ別に論ぜられることになっているので、わたしは努めて初期の時期に限定したい。それには経済学にはじめて対面した学生時代の先生から始めなければならないが、そのためには、その時代のわが国経済学界の状態を知っておく必要がある。

周知の通りわが国で西洋経済学がはじめて講座としておかれたのはわが慶応義塾で、慶応四年(明治元年)福沢先生がウェーランドの *Elements of Political Economy* を講読したのがそもそもの始めだといふ。してみれば小泉先生が斯学に志したのは、それから既に四十年の後である。この間にわが国は総ての面において欧米の文化を貪慾に吸収し、経済学においても殆ど凡ゆる学説が輸入された。その方法たる、いわば手当り次第で、わが国の実情に適當かどうかといった配慮は殆ど皆無であった。しかし経済学説については、次第に独乙歴史学派の勢力が増大し、資本主義の進展と共に、明治三十年ころには、独乙の社会政策学会を模倣した同名の学会が誕生し、経済学者の殆ど大部分はこれに所属するに至った。しかし理論の領域では、当時新たに発足した新古典学派が急速にその勢力を拡大しつつあった。マーシャルが「経済学原理」を公刊したのは、一八九〇年(明治二十三年)で、先生が学生として受けた講義は主としてこの学派のものであった。すなわち、先生は大学予科では気賀勘重先生(現在の気賀健三教授の殿父)からフィリップポヴィッチによる原論を学んだが、先生自ら「フィ氏の立場は穩健な折衷主義で、奇抜な獨創性はなかったが、十分なる学識をもって、経済学全般にわたり、確實精密な叙述を与えてあった。価値論においては、彼れは多くポエム・バヴェルクによって限界効用説を説いた。はじめて経済学を学び、そうしてい

きなりこの精緻な理論を教えられたわれわれは、ただ驚くばかりであった」と述懐している。そして先生は更に福田博士によるセリグマンの講義をきいたが、「セリグマンの価値及び分配理論は、その同僚にして同じく限界思想に立脚して新機軸を出し、すべて生産要素は、それが生産収益に寄与しただけを報酬として受けると説いたジョン・ベッツ・クラークによるものであった。更に当時の理財科ではマーシャルの原論を教科書に用い、福田博士はこの講義に基づいて「経済学講義」と題する書を著した。われわれは早速この「講義」とともに原書を読んだ」と記している。先生がマルクスに接したのは後のことだが、かような素養を経たのちにマルクスに接したことは、「正しい順序」だったと言明している。当時マルクスはわが国では殆ど理解されておらず、その方面の第一人者だった福田博士さえ、「資本論」を読破はしたが、先生の言葉によれば「その深遠なることや難解なることを説くだけで、実質的な批判というものは、当時においてはまだ一つも発表していなかった」。先生はむしろ独乙語教科書として使われたゾンバルトの「社会主義と社会運動」や、カール・デールの「社会主義、共産主義及び無政府主義」によって興味を喚起されたい。デールのこの書はわたしが学生るとき、先生もまた教科書として使用したほどで、かなりの影響力をもったといえよう。なおマルキシズムについて一言するに、なるほど日露戦争以来社会的不安が増大し、社会主義思想乃至運動の発芽したことは事実だが（幸徳秋水の大逆事件は一九〇年）、マルキシズムの本格的導入は第一次世界大戦以後のことではない。してみれば、大正九年、すなわち第一次大戦の終わった翌年、先生が著わした「社会問題研究」と「経済学説と社会思想」の二つは、わが国に本格的にマルキシズムを導入した先駆的著作と言うべきであろう。先生の学問を語るに当って欠くべからざるは、先生の恩師達のことである。先生は一九一〇年義塾大学部政治科を卒業すると共にその教員に採用され、翌々年九月義塾留学生として歐洲に派遣されたが、満三年半の滞在中に先生が聴講したのは、独乙ではシュモラー、ワグナー、ヘルクナー、オッペンハイマー、英国ではピグウ、ケインズ、仏蘭西ではジイドの諸先生であったという。いずれも当代一流の大学者だが、顔振れでわかるように、相互にかなり異なる立場

の人々である。その何れの影響が最も大きかったかは断定の限りではないが、少くとも帰朝直後の論文にはオッペンハイマーとゾンバルトの所説が屢々引用されている。特に前者は先生の後期の論文にも現われるが、彼がナチスに追われて米国に亡命する途中わが国に立ちよったとき、先生が敢然その庇護に当たったことは、学界の美談として今なお語り伝えられている。

しかし先生の真の恩師は、留学中のかかる学者達ではなくて、義塾において先生を育成しまた学界に送り出した福田徳三博士であったというべきであろう。小泉先生が理財科でなくて政治科に入学した理由の一つには、実は政治科における福田博士の講義をきくためであったという。博士は元来理財科の教授として招かれたが、同時に政治科にも講座をもったのである。博士のほか、先生の恩師としては、堀江婦一、田中萃一郎、気賀勘重等々の諸先生を挙げなければならないが、理論経済学と社会問題に限定する限りは、福田博士の影響が圧倒的だったと言ってよからう。そこで、聊か岐路にわたる惧れはあるが、博士そのものに触れる必要があると思われる。けだし博士は、単に小泉先生ばかりでなく、わが国の経済学そのものの方途に決定的影響を与えた大御所的存在だったからである。

二、華々しいデビュー

福田博士は明治七年生れだから、小泉先生より十四歳の年長である。東京高商（今の一橋大学）の教授だったが、校長と衝突し、追い出されて義塾に移り、一九一九年、母校に復帰するまで十数年の長きに亘って義塾に留まった人である。小泉先生は学生時代から博士の特別の教育を受けたわけで、文字通りの愛弟子であった。

福田博士は明治・大正・昭和に亘ってわが国の経済学界に君臨した偉大な指導者である。最初ビュツヒャー及びブレンターノに師事し、新歴史学派の洗礼を受けたが、後には古典学派やマルクス学派、さては厚生経済学にも手を延ばし、理論・学

説史・経済史・政策論と経済学の全野に亘って縦横の活躍を続け、その門下から、小泉先生のほか、坂西由蔵、左右田喜一郎、宮田喜代蔵、中山伊知郎、大塚金之助、大熊信行、杉本栄一等々の第一級の経済学者が輩出し、わが国経済学の発展に無類の功績を残したのである。

博士が若き日の小泉先生をいかに高く評価したかは、先生の処女作ジェヴォンズ「経済学純理」(The Theory of Political Economy, 2nd edit.)の邦訳に付した博士の序文に明らかである。(その一部は屢々引用され、周知のことと思うが、その全文はそれほど知られていないようだから、敢えて引用しておく。)曰く「小泉信三君は慶応義塾が近年に於て産出したる麒麟児の一人なり。業を其の政治科大学に卒ると同時に直ちに挙げられて同塾予科教授となり、経済通論の一科を担当し、学績顕著、学生の愛慕深き内に両三年を経過したりしが、昨年同塾特選の海外留学生たるを命ぜられ、今英国に在り、続て大陸に渡り、主として経済学の理論と学説史との研究を専任とする筈なり。君の教授時代世に公にせる若干の論文及び翻訳の類は、同好学者の間に思想の明晰と文辞の流達とを認められたり。予は慶応義塾に教鞭を取ること前後八年、其間予が講座に列り予が門に出入したる塾生千を以て数ふ可し。然れども頭腦の明快、理解の透徹、学力の優秀、人格の堅固の点に於て、未だ小泉君の右に出づるものに接せしことなし。三田の学舎人材多し。唯だ学問の範囲に其の配布せらるることの今日まで甚だ乏しかりしのみ。之を先輩の中に就いて求むれば、恐らく小泉君以上の卓越せる学者其数少しと為さざる可し。唯義塾出身者の世に出で身を立つる、或は実業界或は政治界に専らにして、学問の世界に方針を定むるもの極めて少し。幸ひ大学部の発展に伴ひ、留学生の派遣比々相續ぐに及び、有為なる学者の三田学舎に起るもの多しと雖も、之を経済学に就いて云へば、堀江・気賀両先輩に続くもの殆ど之なきの状あるは甚だ遺憾とす可き所なり。予は任に義塾に就きてより常に謂らく、予が如きはパプテスマのヨハネたるを得ば畢生の幸福のみ。在任数年若し一個半個の龍象を打出し得て之を義塾に寄進するを得んか、予は其責を尽したるものなり。少くとも第二の堀江博士、第二の気賀教授が予が門下より出づることあらんか、予が性来の

狷介を以て塾僚を煩したる罪は償はるるものとするを得んのみと。予は今小泉信三君を得て之を三田の諸君に還付す。予が事を成し終へたりと自信するものなり。

誤解する勿れ、小泉君は予が自ら養成し出したるものにあらず。小泉君は義塾生へ抜きの固有産物なり。予は僅かに同君大学生時代の三年と教授時代の若干年との間に於て、同君と相交遊し相討論するにより、多少の『フィニシング』を同君の修学に加へ得たるに過ぎざるなり。三田の塾風短所は固より多々あらん。然れども他にたくして独り此に在る特美の一点は、徹頭徹尾土著固有の産物を有すること之なり。予の固有産物と云ふ意は、義塾に於ては親も子も共に教育を效に受け、而して子は小学時代より大学を卒ふるまで未だ一日も他の学舎に就くことなく、其学問生涯を終始して一貫せる義塾一流独特の教育を受けたるものを云ふ。小泉君は此意味に於て醇の醇なる固有産物なり。君の先考は福沢先生の徳風に最も多く薫化せられたる義塾先輩の一人にして、嘗て義塾に塾長たり又横浜正金銀行の重役として実業界に顕著なりし故信吉氏なり。君は其長子に生れ、終始義塾の学窓にのみ学び、而して将来は塾の教授として永く母校に尽さんとする人なり。塾外に生れ塾外に長じたる外様者たる予が此の生へ抜きの三田児と交遊の誼最も厚きを得たるは偶然の出来事なり。而して此偶然は今や不可絶、不可離の因縁と化せり。人事の奇遇顧み来れば、聊か感慨の情なきを得ず。

予は嘗て自己の母校に於て同様の信念を懐き、同様の努力を試み、僅々三年の在職猶ほ左右田、坂西両君を得て常に之を誇としつつあり。坂西教授は今此名著集に予と事を共にしつつあり。其の第一冊として予が慶応義塾に於て得たる小泉君の筆に成る此訳書を紹介することは、坂西教授に於ても予と感慨の情を分たることならん。左右田学士は滞欧十年、汎く彼国碩学老儒の間に交遊し、其学名今や江湖に籍甚せり。而して小泉君の今後十年亦た必ず両君の如くなる可きや、予は今より之を断言するに憚らざるものなり。而して義塾経済学の将来は最早安心して可なり。予は心永く小泉君の帰朝を楽み待たんのみ」と。小泉信三の名がこれによって一挙に喧伝されるに至ったことはもちろんである。

三、ジェヴォンズと福田徳三博士

理論経済学者としての小泉先生の最大の業績が古典学派、とくにリカアドオの研究にあることは言うまでもないが、その先生のデビユーが、リカアドオを仇敵視したジェヴォンズの翻訳であったことは極めて興味深い。卒直に言つて先生はジェヴォンズを必ずしも高く評価したとは思えないが、しかし塾長として多忙を極めた戦争の最中に、その改訳を敢行したところを見れば、決しておろそかにしていなかったことがわかる。しかし当初の訳本には先生自筆の序文がない。先生が訳文を完成したのは明治四十五年、すなわち卒業の翌年だが、先生は訳文完成直後海外留学を命ぜられ、出版されたときはロンドンに在った。しかるに印刷中火災のため序文だけ焼失し、編集者の福田博士は出版の遅延を嫌つて自ら代つて序文を書いたのである。もし先生の序文があつたら、先生が特にジェヴォンズをとりあげた理由も、またジェヴォンズ理論に関する解釈乃至評価も記されていたと思うが、これを欠くため、少くとも動機については、われわれとしては推量を敢えてする外はない(改訳にある序文と解題も、書いたのはわたしであつて、先生ではない)。

先生が理財科でなくて政治科を選んだ主たる理由は、既に述べた通り、福田徳三博士の経済原論を聴講するためであつた(理財科では博士の講義はクラスによつては聴けなかつた)。博士はセリグマンを用いたというが、これは言うまでもなくマーシャルの直系である。マーシャルはジェヴォンズに対してはむしろ嫌悪の情さえ抱いたとはいへ、伝統の古典派と限界効用学派を折衷することによつて、いわゆる新古典学派を確立した人で、彼の理論の中にジェヴォンズ学説は著しい程度に生きているのである。福田博士は歴史学派から出発したが、次第にマーシャルに接近し、講義はその立場から行われた。従つて小泉先生が限界効用説に関心をもつに至つたとしても不思議はない。

先生は卒業の翌年(明治四三年)から三田学会誌に寄稿しはじめたが、明治四四年の第五巻第一号に「ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンと其学説」を發表した。ゴッセンはジェヴォンズによつて発見された限界効用学説創始者で、右の論文はゴッセンの生誕百年を記念したリーフマンの論文を紹介したものである。従つてその中にジェヴォンズが登場していることは言うまでもない。そしてその翌年(明治四五年)には第六巻第二号に「主観的価値論沿革の一節」と題する先生自作の論文が發表された。同年秋には先生はジェヴォンズの翻訳を置土産に留学の途に上つているから、右論文はこの翻訳中に書かれたものである。

これを考えれば、先生が全く自発的にジェヴォンズ邦訳を發意したと推測して差支えないだろうし、事実福田博士も右に述べた序文において、「小泉君が特にジェヴォンズの此書を選んで邦訳し之を其留学置土産と為したる真意は予は唯だ之を推測し得るのみ」と記して、小泉先生自身の發意だと断言している。しかしわたしは実際には小泉先生の發意というよりは、恐らくは福田博士のそれによつたものではなからうかと推測している。けだし博士は当時既に現われはじめた諸外国の名著選集——(例えば Scrittori—Classici Italiani di *Economica Politica*. Guillaumin—Collection des *Principaux Economistes*. Brentano u. Leser—Sammlung älterer und neuerer staatswissenschaftlicher Schriften des In- und Auslandes 等)——に倣つて、「苟くも経済学に志す限りの者必ず読まざるべからざるもの」を叢書として刊行する計画を樹て、ジェヴォンズはこの「内外経済学名著」の第一冊として出版されているからである。かような叢書には予め編集者の決定した計画があるはずで、偶々小泉先生の訳文が出来上つたから、ではこれを出発点として叢書を作ろう、ということになつたわけではあるまい。私自身助手のころ、経済学部で企画した経済学古典叢書のマルサス人口論の翻訳を命ぜられ、自信なきまま躊躇していたとき、先生から「やつて見給へ、どうにかなる。僕にも経験があるよ」と言われたことを覚えてゐる。自信の有無は別として、動機は先生の場合も同じではなかつたかと思ふ。

この推測が果して當つてどうかは別として、では福田博士は如何なる理由で敢えてジェヴォンズを叢書の第一冊に

選定したのであろうか。これが解答は同じ序文の中にはっきり記されている。そしてこの部分こそ、学問に対する博士の基本的態度を端的に表明した貴重な文章として永く記憶されて然るべきものであろう。博士はその序文を次の如き文章で結んでいるのである。曰く「予がまた此訳書を『経済学名著』の第一冊として採択し現代の我邦思想界に提供する所以は、ジェヴォンズが千八百七十年代の英国に期したるもの、我等之を大正初頭の我邦に期するが故のみ。曰く、権威の打破、偶像の破壊。」

では博士が打破せんとした権威とは何であったか。破壊せんとした偶像とは何であったか。

言うまでもなく明治から大正へかけてのわが国は、正に資本主義の開花期である。日露戦争の勝利はそれまで漸進してきた工業化を飛躍的に推進し、高度資本主義への道を開いたのである。しかしこの急進は同時に資本主義の矛盾を増大せしめざれば歇まなかった。もともと当時わが国経済発展の原動力となったものは露骨な国家主義乃至は侵略主義で、国民の厚生の如きは殆んど完全に無視されたから、一方における富の増大は他方における悲惨と貧困の拡大を齎らざるを得なかった。低賃金、労働強化、衛生施設の不備等々はあらゆる部門に共通だったが、特に鉱山や紡績業において最も甚だしく、由々しい社会問題を惹き起さざるを得なかった。社会主義的思想や運動の抬頭したのは当然で、幸徳秋水、西川光次郎、片山潜、安部磯雄らは明治三四年、わが国最初の社会主義政党「社会民主党」を結成した（但し即日解散された）。かくてわが国の経済学は従来見なかつた新しい問題に直面するに至ったのである。では経済学者達はこれをいかに受けとめたか。

当時のわが国の経済学はドイツ歴史学派によって独占された感がある。福沢先生によって西洋経済学が導入されて以来、わが国は殆どあらゆる学説を輸入したが、それらはわが国の歴史的・社会的段階とは無関係に、いわば手当り次第にかき集められた傾きがある。しかし上記の如く帝国主義と結びついた資本主義が幾多の矛盾を露呈しはじめたとき、事情は十九世紀後半のドイツに最も近かつたため、ドイツ的手法が高く評価されるに至った。周知の如くドイツでは歴史学派とくに後期

歴史学派に属する学者達が、資本主義の欠陥を指摘しつつも、これを国家の社会立法によって是正し、いわゆる修正資本主義によって資本主義の存続と拡大を意図した。講壇社会主義がこれであり、その具体的活動の機関として生れたのが社会政策学会（Verein für Sozialpolitik）である。わが国における新歴史学派は金井延、和田垣謙三らを中心とし、初期においては、一方では田口卯吉や天野為之らの自由主義と、他方では幸徳秋水や安倍磯雄らの社会主義と対立していたが、政府の極端な国家主義の下では自由主義も社会主義も発展の余地なく、これに反比例して新歴史学派の成長は目覚しく、遂に学界の主潮流にのし上った。そして明治三十三年（一九〇〇年）にはドイツに倣って社会政策学会が誕生したが、当時の大学教授にしてこれに参加しなかつた者は殆どない有様であった。中心となった桑田熊蔵、金井延、小野塚喜平次、高野岩三郎、山崎覚次郎等々が、福田博士自身またその主要メンバーであった。社会政策学会の性格は明治三十三年の「社会政策学会趣意書」に明らかである。曰く「余輩は放任主義に反対す。何となれば極端な利己心の発動と制限なき自由競争とは貧富の懸隔をはなはだしくすればなり。余輩はまた社会主義に反対す。なんとすれば現在の経済組織を破壊し資本家の絶滅を計るは国運の進歩に害あればなり。余輩の主義とするところは現在の私有的経済組織を維持し、その範囲内において個人の活動と国家の権力とによって階級の軋轢を防ぎ、社会の調和を計るにあり」と。この限りでは一箇の修正資本主義に外ならないが、時局の進展と共に国家主義の色彩濃厚となり、例えば日露開戦を主張した有名な「七博士」の大半はこの学会の中心的存在であった。この学会はもともと経済理論的背景の乏しい歴史学派の産物であったから、第一次大戦後新しい経済学の進歩、労働攻勢の激化、とくにマルクス理論の抬頭によって次第に弱体化し、大正十三年（一九二四年）遂に解散してしまった。しかし小泉先生が福田博士の指導を受けたのは、明治末期から大正初期にかけての時代、すなわち社会政策学会の全盛期であった。そしてジェヴォンズの訳文が完成したのは明治四十五年、すなわち大正元年である。然らばそのころ経済学の領域において、もし打倒すべき権威、破壊すべき偶像があつたとすれば、歴史学派のほかにはあり得ない。そして正に博士はこれを次

の如き辛辣極まる文字を連ねて喝破しているのである。しかもこの一文は同時に博士がジェヴォンズを如何に評価したかを物語って余りある。曰く、「ジェヴォンズが経済学に於ける任務は彼自ら公言せる一語に尽きたり。曰く『權威の破壊』。若し目下流行の語を藉らんか、経済学に於ける現状の打破、是れジェヴォンズ畢生の題目なり。元より彼は破壊を以て能事としたるにあらず、否彼が建設したるもの亦偉大なり。然りと雖も経済学史に於ける彼の地位を決定するものは、彼が如何に大なる破壊を成し遂げ得たるかの一事にありて、其建設したるものは、偶々之を補助す可き材料たるに過ぎざるなり。予は経済学史の全体を通じて最も偉大最も絶倫なる破壊の効業は之を我ジェヴォンズに帰せざる可からざるを思ふものなり。何故に彼の破壊は大なるか。答、彼は破壊の爲めに破壊せず、彼は破壊を以て破壊せず、建設の爲めに、而して自ら建設するによりて破壊したればなり。正統旧派を倒したるものは独乙歴史学派なりとは普通に信ぜらるる所なれども、予は信ぜず。見よ、歴史派は何物を建設せしや。彼等は正統派の誤謬と欠点を指摘するに於て甚だ喧し。然れども打倒したる正統旧説の代りに彼等は何物を建設的に寄与したりしや。正統学の需要供給説・生産費価値説に対抗す可き如何なる新学説を打出したりしや。仔細に点検し来り見よ。吾人は歴史派の効績に就て茫然たらざるを得ざるにあらずや。之に反しジェヴォンズとメンガーとは同じく千八百七十一年に各建設的に自家の新天地を開拓したり。ジェヴォンズは此建設によりてリカルド、ミル派の旧説を根柢より覆さんとしたり。而して此より後経済学の新時代開けたり。ジェヴォンズの大は「アイコノクラスト」の大なり。此意味に於て彼は殆ど空前にして而して確実に——今日までは——絶後たり。而して彼は十九世紀が産出したる若干の大経済学者の一人にして、英国が産出したる第五の大経済学者たり」と。(句読点は原文のまま)

ジェヴォンズ評価の当否は別として、歴史学派に対する博士の斯くも強烈な反抗は、ある意味では意外である。けだし博士は四年の永きに亘って歴史学派の巨匠ビュヒャー及びブレンターノとの関係は深く、博士の最初の著書「労働経済論」(一八九九年)はブレンターノとの共著であり、また後に(一九〇七年)坂西由蔵によって「日本経済史論」の題下に邦訳され

て博士の名を更に高からしめた *Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan, 1900* は同じく留学中ブレンターノの指導によって完成したものである。更に、帰朝と共に社会政策学会の有力なメンバーとして活躍したのであるから、いわば歴史学派の最も生粋な一員だったわけである。しかし既述の通り博士の関心はその後次第に新古典学派に傾き、遂には右の文章に見らるるが如く、完全に反逆者の立場に立つてしまった。端倪すべからざる博士のこの変身は、ある意味では博士の特徴で、慶応義塾百年史には、博士が「経済学に関するその時々の問題点には、どのようなことにも飛びついた」興味ある若干例が紹介されている。例えば「彼の弟子の左右田喜一郎がドイツから帰朝して経済哲学を説き、カントやリッケルトが問題とされるようになると、直ちにこれを採り上げて「カント国家及び法律哲学と論理形式主義経済学」を執筆し、あるいは「カント永遠の平和」を論ずるなどして人を驚かした」と記されている。第一次大戦以後はマルクスに没頭し(高島素之と共に資本論の導入に努めたことは周知の通りである)、最後にはピグーの厚生経済学にも手を延ばしたわけ、思想的遍歴の跡は目まぐるしいほどである。一つに安住し得なかったのは、裏がえせば激しい反抗精神の現われといえよう。かような精神は博士の生得のものらしく、一橋を飛び出し、また義塾を飛び出したいきさつも、これを裏書しているようである。

何物をも建設しなかったという理由での歴史学派への挑戦なら、純粋に経済学の領域内の問題だが、しかし博士の後の活動と照合すれば、一つの推量が生れてくる。それは歴史学派の名を借りた、その背後にある国家主義への反抗ではなかったかということである。博士が後に高島素之の「資本論」邦訳を援助したことは前述したが、また吉野作造、大山郁夫らの進歩派と結んで、民主主義の普及を目標とする「黎明運動」に活躍した。社会主義も民主主義も反国家主義たる点では同じである。そしてわが国の国家主義が歴史学派およびその分身たる社会政策学会と結合したことは既に述べた。してみれば歴史学派打倒は旗印で、真の敵は本能寺にあったという推測も、必ずしも邪推とはいえないのではあるまいか。

なお余談に互るが、あれほど小泉先生をもち上げた博士だが、必ずしも常に先生に甘かったわけではない。博士が先生の論文をコキおろして先生を落胆させた条りは、高橋誠一郎先生の追悼文に幾分劇的に紹介されている。卒直に言ってその後の博士と先生との関係は、予想されたほど進展はしなかったようである。先生は機会ある毎に師や友を語ったが、福田博士については案外少い。それが二人の対蹠的な性格の相違によるものか、はたまた何らか特別な事情があったのか、それらは高橋先生にでも伺うほかないであろう。

四、先生のジエヴォンズ評価

小泉先生の名を一挙に高からしめたジエヴォンズを、然らば先生自身はいかに評価したか。先生は特にジエヴォンズを主題とした研究を発表していないが、リカアドオ研究の中でこれに触れている。すなわち、ジエヴォンズがリカアドオに反対して提起した「価値は全然効用に基づく」との命題について、次の如く言っている。「ジエヴォンズの学説は決してジエヴォンズ自ら信じたほどに革命的なものではない。……リカアドオは、もし吾々にして強いてその不用意の立言に拘泥するに及ばなければ、決して価値が労働から発生すると謂って居らぬ。貨物間の現実の交換比率は需要供給の関係に由て定まるものではあるが、労働投下に由てその供給量を増加し得るものにあつては、供給が直ちに需要に追隨して、交換比率が費される労働量に比例するような需要供給関係を造り出さずには措かぬというに過ぎないのである。ジエヴォンズは労働が屢々価値を定めるかの如く見受けられることは認めるが、それはただ間接の方法に於て、即ち貨物の効用をその供給の増加もしくは制限に依て変動せしむるに依て然るのであるといひ、また生産費と価値との関係を述べて、

「生産費は供給を定む

供給は最終効用を定む

最終効用は価値を定む

と謂っている。併し乍らこれはリカアドオの立場から見ても、リカアドオ自身それを理解すると否とを問はず、少しも容認し難いことではないのである。……それは従来の価値論に於て、与えられたものとして承認せられていた貨物供給量の増減と需要強弱との関係に周到綿密な考察を加へたに過ぎぬものである。それは従来価値論の或一面を精確にし、且つ豊富にすることは出来た。併し決して既存の価値論と相対立すべきものではない。ただそれを補うべきものたるに過ぎぬ。ただ貨物の価値を決するものは何処迄も需要と供給と或は効用と稀少性とであつて、労働又は生産費は、この供給又は稀少性を左右するものとして始めて価値に影響するのであるから、効用学説は生産費説に対して、特殊に対する一般の地位に在り、ただ或場合に生産費は効用よりも一層明確に価値を測定せしむることがあるというに過ぎぬ」と。結局先生は費用説と効用説とは恰かも缺の両刃の関係にあると見たマーシャルに左袒し、特にマーシャルの「……原則として吾人が考察しつつある期間が短かければ短かきほど、我々は大きな注意を価値に及ぼす需要の影響に分たなければならぬ。又期間が長ければ長きほど価値に対する生産費の影響は益々重要となるであろう」との言葉をもって、「これがリカアドオの価値学説の補充せられ修正せられて到達した現在の状態である」と結論しているが、それは同時に先生自身の到達した結論でもある。

わたしは先生追悼の一文の中で、後の有名なマルクス論争において先生が多分に依拠したボエーム・バヴェルクはジエヴォンズと同系の限界効用学派の一員であつた点から見ても、ジエヴォンズが先生に与えた影響は相当大きかつたはずだと思つた。中山伊知郎教授は、「ある人々は小泉先生のマルクス批判を主観主義価値論の立場からするものとして、後の限界効用学派の中に数えているが、これは間違いだ」と指摘している。正にその通りで、わたしも先生がこの学派のものとは思っていない。先生はあく迄も古典学派の一員であり、マルクス批判も殆ど常にリカアドオの立場からなされたことは事実である。ただあの論争において先生が大なる程度にボエームを引用したこともまた事実で、わたしの真意は、先生がボエームを

他のオースタリー学派にも注意を払うに至った最初の機縁はジェヴォンズ研究にあったのであろうというだけである。もつとも先生がマルクス批判において全くジェヴォンズを引用しなかったわけではない。例えば「搾取理論の根拠」と題する論文においては、ジェヴォンズの「市場の理論」すなわち「一物一価の法則」を採用しているのである(マルクス死後五十年、一五六―八頁)。

かように小泉先生はジェヴォンズをさほど高く評価しなかったに拘らず、戦時の最も多忙の時期に敢えてその改訳を試みたのは如何なる理由によるか。これには私自身も関係があるので一応の説明を加えておきたい。昭和十六年七月、高田保馬及び九谷喜市両博士主唱の下に「数理経済学叢書」刊行の企画が決定したが、その趣旨は次の通りであった。「わが国に於ける理論経済学の研究に於て最も遅れて着手されたものは、謂はゆる数理経済学の分野である。いま、その原因が何処に於つたかを問ふ必要はない。唯だ明かなことは、斯くして我が国に於ける理論経済学はこれまで其の認識および行論の精密さ乃至正確さに於て欠くる所があった、と言ふ一事である。……これ敢て茲に諸外国に於ける数理経済学の研究諸結果を訳述して江湖に送らんとする所以である。期する所は固より単なる知識の輸入にあるのではない。多少なりとも我が国独自の経済学の建設および進展に貢献し寄与せんとするにある。今や大東亜戦争は、海に陸に嵐の如き勢を以て進められ、其成果のまことに赫々たることは、我等国民の感激措く能はざる所である。武力の進行に続くものは、何よりも先づ経済建設でなければならぬ。而して経済建設は明確精緻なる理論を基底として初めて完全の効果を期待し得るであろう。……」

数理経済学を戦争と結びつけた点など、当時の世相を窺わしめるに充分で、感慨なきを得ない。集まったのは上記の両先生のほか、坂本弥三郎、水谷一雄、中山伊知郎、杉本栄一、安井琢磨、山田雄三、山田勇、久武雅夫、家本秀太郎、青山秀夫の諸君で、塾からは小泉先生、永田清および私だったと思うが、確かではない。銘々の分担を相談し、小泉先生はジェヴォンズの改訳を承諾したわけだが、永田と私がお手伝いを命ぜられた。改訳の理由は第一に経済学純理は原著者の第二版の有名な序文と附録が省かれており、第二に訳文が古風な文語体で読みにくかったからだが、若干の小さなミスが介入していたことも事実である。先生は多忙のため、初めの三章のみを担当したが、その見事さはわれわれ二人の担当分と較べれば一目瞭然である。なおわたし自身は別に *W. Zawadzki—Les Mathématiques appliquées à l'Economie Politique* を担当し、最も早く出版された(昭和十七年)。ジェヴォンズの出版されたのは終戦直前の昭和十九年である。戦局の逼迫によって他の諸君の分は大半うやむやに終り、僅かに安井君のヒックス「価値と資本」が昭和二十六年に出版された程度である。

五、先生と古典学派

三年半の留学において先生は、上述の如く、極めて多くの一流学者に接したが、興味を中心は純理論よりもむしろ社会思想にあったようである。これに関する先生の、と言うよりは当時のわが国の、知識水準の極めて低かったことは既に述べたが、先生自身、その「私の履歴書」の中で、「当時すでにカント派法哲学者スタムレルのマルクス批判は、紹介されることはされていたが、よく理解されなかったと思う。ベームの価値論批判、ベルンシュタインの修正、ヒルファディングの資本論展開は、何れもすでにヨーロッパでは行われていたが、日本の学界はあまり問題にせず、概して呑気なものであった」と述懐している。だからロンドンのヘンダースン書店で、「政府と私有財産制度と一夫一婦婚その他すべて現行秩序に反抗する一切の主張の文書は皆な集まっている」のを見て驚嘆し、「一冊そっくり買う」ほど買いあさった。先生が真剣に左翼思想と取り組むに至ったのは、その頃からであろう。

大正五年三月帰朝した先生は翌月から教壇に立ち、以来経済原論、学史、社会問題、ドイツ語経済学等を担当した。わたしが本科に進んで始めて先生の講義に接したのは大正十年だから、先生は既に三十三歳、誠に堂々たる教授振りであった。理財科は大正九年に経済学部と変わったが、当時のスタッフは気賀、堀江、高城、滝本、阿部、高橋、三辺、増井、向井の諸

先生で、外人教師としてはブキャナンがいた。後に活躍した野村、加田、園、奥井、金原等の諸君は、まだ駆け出しの助手に過ぎなかった。何といっても気賀、堀江両先生の天下だったが、実際に最も精彩を放っていたのは、高橋、小泉の両先生であった。小泉先生の有名なマルクス論争は、大正十一年二月の「改造」に発表された「労働価値説と平均利潤率の問題」に始まるから、丁度わたしが本科一年生のときであった。この論争がわたしたち学生に与えた影響は甚大なるものがあり、授業そっちのけで怪しい議論をたたかわせたものである。しかしわたし自身は先生のゼミでジェヴォンズと取組んでいた。先生自身の曾て扱った問題でもあり、またこの種のテーマをとりあげた学生が少かった関係もあって、わたしは特別の指導を受けることができた。但し先生は数学はあまり得意ではなかったので、わたしが生嚼りの数理経済学を振りまわすには閉口したらしく、二年後に永田清が先生のゼミへ入ってワルラスをやると言いつ出したとき、大学院へ進んだわたしをつかまえて、「また面倒な奴がはいってきた。お前が相手になってやれ」と押しつけられてしまった。

先生は師の徳田博士同様、教室ではマーシャル流の原論を講義した。教科書はチャップマンの原論で、いわばマーシャルの縮冊版である。卒直に言つて先生のこの講義は、先生の「社会思想史」ほど魅力的ではなく、むしろデイールの「社会主義・共産主義および無政府主義」を使った独乙語講読の方が精彩があったと思う。先生はもともとリベラリストだから、無政府主義という最も極端な自由主義にはかなり同情的で、例えば、クロポトキンの相互扶助論など、教科書を離れての講義は誠に感銘深かった。わたしは元来フランス語のクラスだったが、慾を出してドイツ語を独習し、おかげで先生のこの講義にも出入を許されたわけである。フランス語経済学は増井幸雄先生(商学部増井教授の厳父)だったが、その関係で先生のジャン・パティスト・セイの翻訳に僅かながらお手伝いできたことは望外の光栄であった。

そのころ(大正末期から昭和初期)先生の主たる関心は古典学派とマルクスにあったようで、「社会問題研究」「経済学説と社会思想」「社会組織の経済理論的批評」等を続々発表し、大正十二年には、代表作の一つ「価値論と社会主義」が現われた。

しかし理論経済学についての最大業績は昭和三年のリカアドオ「経済学及課税之原理」の邦訳と、昭和九年の「アダム・スミス、マルサス、リカアドオ」であろう。前者は昭和五年、原著各版の異同を注記した改版が公刊された。その仕事にはわたしと永田清が動員されて各版読み合わせのお手伝いをしたが、先生の熱心さには唯だ驚くのみであった。後者は既に発表された分を纏めたもので、スミスは「アダム・スミス傳」、マルサスは拙訳マルサス「人口論」のために執筆した解題、リカアドオは上記の原論の解題および昭和四年の「リカアドオ研究」を補足訂正したものである。

先生は「平生正統派経済学を尊重し、今日の経済学も猶ほ正統学派に負ふ所が甚だ多いと認め」ており、特に右の三巨頭に対しては、異常な敬意を抱きつづけた。先生は、正統学派に所属する諸学者、必ずしも理論の上で一致していないに拘らず、これを一括して正統派経済学者というる所以は、彼らがスミスに対する尊敬の念において共通しているからだと言明した。この意味でも、先生は明らかに正統学派の最も忠実な一員なのである。マーシャルがジェヴォンズの「経済学の理論」を読んだとき、「リカアドオに対する若き日の忠誠心がわきかえった」といった言葉は、新古典学派をも含めて正統学派の本心を吐露しているのであろう。

「アダム・スミス、マルサス、リカアドオ」はこの三巨匠の理論だけを論じたものではなく、多分に評伝的な著作である。この中マルサスについては、それが「人口論」解題として書かれた関係から、彼の経済理論については殆ど触れていない。それらはむしろリカアドオを論ずる際に言及されている。しかし「人口論」については、この「問題は過去の問題ではない。現在も将来も吾人の当面しなければならぬ問題である。マルサスは幾多の先人、同時代人の間において、最も力強く此問題を提起し、且つそれに彼れの解決を下した人である。此意味に於て人口論一卷は社会科学上不朽の価値を有するものである」と結論した。先生が卒業したばかりのわたしにその翻訳を命じたのも、明らかにこのような評価から出たものと思う。わたしは先生のゼミナールにおいてジェヴォンズを研究していたほどだから、興味は主として数理経済学に注がれており、

人口論については全く無知であった。だからこの命令には聊か不服だったが、取りかかってみて初めてマルサス人口論だけでなく、人口問題一般の重要性に気付いた次第で、人口研究者としてのわたしの方向を決定した最初の動機は、正に先生のかかるマルサス評価にあつたといえるのである。

それは別として、先生のマルサス論には特別に目新しい見解はないが、人口原理が正統学派の理論構成において、如何に不可欠の礎石たるかを強調すると共に、反対者の所説に対しては終始マルサス弁護に努めている。特にマルクスの人口理論すなわち産業予備軍に対しては次の如く言っている。「このマルクスの批評には多分の真理が包まれてゐる。今日大衆の窮乏は明かに人口に対する食物の欠乏にのみ因るものではない。過剰人口と称せらるるもののは実は失業者に外ならぬことを指摘したのは、確かに適切なる観察であろう。併し乍ら人口問題は果して失業問題を以て終始するか。思ふに失業問題以外に人口問題なしといふことは、マルサスと反対の方向に走った誇張の論断である。仮りに人口に対する充分の食物があつても、猶ほ失業が困窮を発生せしめることは成程争ひ難き事実である。併し仮りに失業問題の完全に解決された其暁に、果して常に人口を養ふだけの充分の食物が存すべきや否やは、別に考究を要する大問題である。マルクス自身の理論を見ても、人口問題は無用の問題ではない。人口と食料とは猶ほ資本関係を挟んで相対立しているやうに思われる」と。そして更に続けて、労働供給を抽象した産業予備軍説の不備を指摘し、マルクス説が極めて多くの条件の下でしか妥当しない所以を論断したのである。

先生のこの論文において独自のと思われるのは、マルサス人口論に対する極めて多くの賛否両論を先生自身の考えで分類していることであろう。この種の試みは多くの学者によってなされているが、その多くは徒らに細目に走り、却つて理解を妨げる傾きがある。先生はエンブソン及びエルスタアの分類を挙げたのち、次の如き分類が最も便利だろうと言っている。

(一) マルサス主義を奉じて謂はば之を世襲財産として継承する正統学派

(二) 困窮罪惡を社会制度の罪に帰し、マルサスの之を自然の原因によつて説明するに反対する社会主義者

(三) 各種の理由に由て人口増加はマルサスの説く如く速ならず、或は食物の増加は彼れの説く如く遅からざることを主張する諸種の反対者

この分類は他の諸家のそれに較べて甚だ簡単で要を得ているが、第三が聊か総括的すぎるといふ批判もある。しかし専門家に対しては別として、一般的理解のためには充分と思われるので、わたしは屢々これを利用してゐる。

スマスに関する部分は特に評伝的だが、これは昭和七年改造社から出版された「アダム・スマス傳」に基いたからである。従つてここではスマスの経済学だけでなく、スマスの全般が論及されている。全体を貫くものはスマスに対する深い尊敬の念であつて、彼における幾多の不備や矛盾も極めて同情的に説明されているのである。特に、道徳情操論では、「同情」を人間動機を中心とし、国富論では「利己心」をもつてそれとしているが、これに関して学者の間に理論的矛盾を云々する傾きあるに對して、先生はこれを否定し、この二つは一つの完全な体系たりうることを主張した。これによつて少くとも我が国に於てこの疑問は解決された感があるが、しかし先生のこの解釈が全く先生独自のものといへば聊か言い過ぎである。

さてリカアドオについては、先生の業績は改めて説くまでもない。既に昭和三年にリカアドオの「原理」の邦訳を、翌年には「リカアドオ研究」を公刊したほどで、従つてリカアドオに関する部分は、「アダム・スマス、マルサス、リカアドオ」の中で最も精彩を放っている。ここではリカアドオを巡る先輩、同僚および後至者との関係も仔細に検討され、先生の知識領域の広さを窺わしめるに充分である。マルサスの部で省略された彼の経済理論も、ここではかなり詳細に論及されている。穀物問題にはじまるマルサス対リカアドオの対立は、後には価値論、地代論、恐慌論等々、殆ど経済学全野に亘る論争に発展したが、その過程は先生のこの論文においても一つの主要点となっている。ジェヴォンズが、そして更に後に至つて

ケインズが、マルサスに左祖したことは周知の事実だが、先生は、絶えずリカードの好意的解釈に終始したといつてよい。例えば「抑もリカードが其数量の任意増加せらるる貨物に限って、其の交換価値は労働費用に由て決せられると謂つたのは、何故であつたか。抑もリカードが着目するのは、一原因の直接一時的の結果ではなくて、その永続的作用である。彼れは固より需要が価格を動かすことを知らぬものではない」云々といひ、別の個所では、前述の通り、ジェヴォンズのいわゆる新説なるものも、決して相容れぬものではない、と断言して、むしろ、ジェヴォンズの誇張を戒めているのである。

先生のその後の活動は、有名なマルクス批判に移つたが、先生のバックボーンは常にリカードであつた。マルクスが同じくリカードから出発したことは周知の事実だが、「社会主義者によるリカード価値論の展開は、マルクスに依て其頂点に達し、而してマルクスの価値論は、予を以て見れば、リカードから離れることに依て失敗に終つて居る」という先生の断定は終始渝らなかつた。なお同じくリカードから出発し、同じくマルクス批判者となつたシュンペーターと先生との異同点は、三田評論の追悼号に掲げられた中山伊知郎教授の「小泉経済学の本質」に詳しい。また同号の久保田明光教授の「経済学者としての小泉信三」は、スミス、マルサス、リカードに対する先生の終世の関心と敬意を描写して余すところがない。

若き日の先生の理論経済学研究が、先生のも後の知的活動にいかん活用されたかは、本号のそれぞれの論文の課題である。わたしはこの稿を終るに当つて、先生が昭和八年、僅か四十五歳にして塾長の重任に就いたことを、改めて遺憾と感ぜざるを得ない。それは言うまでもなく、経済学の立場からで、別の観点からは別の結論の引出せることはもちろんである。しかしこと経済学に関する限り、それ迄のひたすらの歩みは塾長就任と共に俄かにその方向を変えてしまった。爾来、先生はせいぜい旧著の改訂に努めただけで、新しい経済学上の発展は遂に見られなかつたのである。もしあのままの歩みを続け

たとしたら、如何に素晴らしい経済学者に成長し、如何に多くをわが国経済学の発展に寄与したことであろう。そしてこのことは、恐らく先生自身によって最も痛感されていたはずである。万人に敬慕されて輝かしい一生を全うした先生にとつて、それは一つの見果てぬ夢であつたと思われてならない。